

## 会 長 あ い さ つ

### 在外派遣教員経験者の果たす役割

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会  
会長 大塚 雅夫

会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。平素より国際理解教育の活動にご協力いただき感謝申し上げます。

日本を取り巻く国際環境は厳しい状況ですが、日本においても原油の値上げによる影響が出ており、国際情勢の波は、確実に影響してくることがわかります。しかしながら、日本に住んでいると島国のせいかな身の回りのことに左右され、国際情勢について考えることがなかなかできません。

教育に目を向けると、新学習指導要領改訂の内容が紹介されると、総合的な学習の時間が削減され、英語活動が入るからどうしようとか、そちらに目が奪われてしまいます。しかし、中国を始め東南アジアの国々はすごい勢いで日本に追いつき、追い越していく状況です。自分自身毎年夏には海外に出かけていますが、訪れた東南アジアの国々からは、実感をもって感じました。高校生の様子を日本と外国と比較しても、その違いは、最近の意識調査の結果を見ても歴然としています。

そこで、私たち在外派遣教員経験者の果たす役割が今こそ大きいことを感じます。文部科学省からの、文書を通して在

外教育施設派遣者の帰国後の役割について、明言するようになったのも、このような背景があるのではないのでしょうか。

海外にボランティアとして行って直接援助協力すればいいのですが、学級担任をしていると不可能です。そこで、県国際理解教育研究会の支部もほぼ立ち上がり、支部ごとに情報交換ができるようになりましたので、今こそ、勤務している学校や地区を通して、国際理解教育を実施するべき時期になったと思います。

壮行会や帰国報告会など県の会合だけでなく、各支部の会合にも積極的に参加し、お互いに情報交換や励まし合いをすることにより、実感を伴った国際理解教育に貢献していきましょう。せっかく海外での教育を実践してみても、一人では、その中に埋没してしまい貴重な経験をかせません。同じ悩みや苦しみ、それを通しての喜びを味わった私たち在外派遣教員経験者だからこそ、真の国際理解教育を実践できるのです。日本だけの論理では、もはや世界から取り残されてしまいます。お互い、報告会などの会合に積極的に参加して、未来を担う子どもたちの世界の国々と連携できるような子どもたちの教育を担っていきましょう。

## 在外教育施設に派遣されている先生方からの便利

### 子どもの言語環境

リマ日本人学校（2006年度派遣）  
坪井 悟  
（取手市立取手第二中学校）

リマ日本人学校へ赴任して1年4ヶ月が過ぎました。リマでの生活にも慣れ快適に過ごしています。ペルーにはたくさん

の世界遺産があります。「マチュピチュ遺跡」「ナスカの地上絵」「インカ帝国の古都クスコ」など、世界を代表する



マチュピチュ遺跡

歴史ある国です。日本に比べ治安が心配です。生活に慣れるのと同時に、危険な場所や状況が把握できてきました。海外生活において、その国や地域での危険度を感じながら生活することが大切だと思います。

リマ日本人学校は、小学部と中学部合わせて45名です。ペルーに移民した日系人が多く、その歴史は100年以上になります。現在、日本人学校に在籍している児童生徒は、日本人ばかりではありません。学校経営の問題から、ペルー国籍の子どもたちもいます。

子どもたちの学校での言語は「日本語」です。しかし、学校での日常生活は、日本語とスペイン語の2カ国語を使っています。学校の中では日本語を使うようにと指導していますが、自分の表現しやすい言葉を使うのは仕方がないのでしょうか。ペルー国籍の子どもたちの家庭環境を見ると、ほとんど母親がスペイン人、スペイン語が家庭の中での中心言語です。そんな生活の中で、日本人学校で日本語を使い学習しています。国語の授業で、教科書の内容や言葉なら感じる情景など、感覚で理解させることは困難なことです。いろいろな方法で学習を進めています

日本人のペルー人も、国や環境が違っ

ても子どもが育つ課程で母親の言語がそのまま子どもに伝わることを感じます。

母親の偉大さ、親の影響の大きさを感じます。日系人の中に、現地の学校に通い日本語とスペイン語を



コルカ渓谷のコンドル

話す小学生がいます。父はスペイン人、母は日本人です。学校ではスペイン語、家庭では母親とは日本語、父親とはスペイン語と日本語です。この例からも母親の存在を強く感じます。

子どもを「どこの国で」「何人として」育てるのかのビジョンを親がしっかりと持つことが大切ではないでしょうか。「何人として、何語を身につけるのか」。子どもの環境を作るのは親の勤め。日本でも海外生活経験のある子どもや外国人が増える中、ここリマでの生活でも感じたことを書きました。これからも海外での見聞を広めたくさん経験をしたいと思いません。

### マレーシア（クアラルンプール）

クアラルンプール日本人学校  
檜山 和寿  
（水戸市立第四中学校）

（クアラルンプール日本人学校）

幼・小・中合わせて在籍数は860名います。

本校の特色として、全学年での英会話授業（EC）、現地指導員によるイメージング（英語の指示で行なわれます。）、年2回の国際交流会、中学部での週2回ほどのサークル活動などが挙げられます。

また、毎年7月に盆踊り大会が開かれます。その盆踊りで中学部3年生は、檜の上で太鼓を叩いたり檜の上で踊ったりします。今年も3万人以上の地元の方が

参加する大規模な盆踊り大会になりました。3万人がいっせいに踊る姿は圧巻でした。地元の新聞でも大きく紹介されています。このような盆踊りでの経験は、生徒たちにとって一生の思い出として心に刻まれたようです。

(マレーシア)

毎朝5時半、アザーンというイスラムのお祈りの声が聞こえてきます。1日に5回お祈りは行なわれるそうです。また、クアラルンプール市内にある伊勢丹の一角にもお祈り専用の一室が設けられており、イスラム教徒はそこでメッカに向かいお祈りを捧げています。ドトといって、頭からベールのようなものをかぶった女性もたくさん目にします。一方で、インド以外で最大級といわれるヒンドゥー教の聖地バトゥケーブがあります。中国風のお寺もよく見かけます。様々な宗教が存在し、マレー人、インド人、中国人など様々な人種の人々が住んでいるのがマレーシアです。

世界各地での宗教対立や民族対立がよくニュースで報道されますが、ここマレーシアでは、それぞれがうまく共存しているように感じます。人々も大変穏やかで、親切です。先日、地元の学校で道徳の授業を見せてもらいました。そこで教えていた先生から特に重要な点として伝えている内容を聞きました。それは「神の存在を信じること」、「寛容であること(他の宗教や、無神論に対しても)」だそうです。日本との違いを感じる反面、「寛容であること」を強調して教えている姿勢が、平和なマレーシアの一端を担っているようにも感じました。



クアラルンプール日本人学校へ赴任して、早くも4ヶ月が過ぎました。あっという間に過ぎてしまった感じがします。今後も様々な研修と積み、これからの教員生活に生かしていこうと思います。

## スリランカ生活3年目

コロンボ日本人学校 渡部 哲  
(つくば市立並木小学校)

スリランカはインドの南方にある、北海道をひとまわり小さくした島です。赤道に近く、私が赴任しているコロンボは、年間を通して気温が28℃から32℃くらい、まさに常夏です。日本では紅茶の生産地として、また、2004年12月のインドネシア・スマトラ島沖大地震のため津波被害を受け多くの犠牲者が出たことでも知られています。

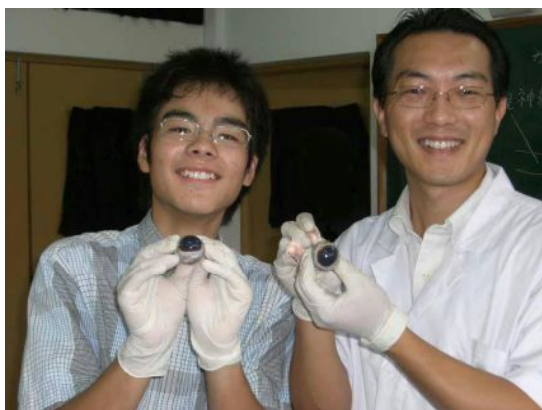
津波被害がまだ新聞を賑わせていたころ、スリランカへの赴任が決まり、少し不安を感じたことをおぼえています。また、現在、スリランカの北部・東部地域の分離独立を主張するタミル過激派(LTTE)とスリランカ政府との間で武力紛争が続けられてきており、日本人学校があるコロンボでも時々テロがおきます。また、熱帯性の病気、デング熱などの病気もあり、今のところ私は免れていますが日本人学校の教員も毎年1、2名はデング熱にかかっています。

不安な点もありますが、ココナッツジュース、ドリアン、パパイヤ、マンゴー、マンゴスチンなどの果物、特産品の紅茶、本場の辛いカレーなどの食べ物もおいしいこと。象や1メートル以上もあるオオトカゲなど珍しい動物が見られること。1年中夏服で過ごせること。人々が日本人にとって友好的ということなど、楽しいこともあります。このごろは、紅茶にアリの浮いていても平気です。

コロンボ日本人学校は日本からの派遣教員9名、子どもの在籍が35名の学校です。私は現在、教務と中学3年生の担任、中学部の理科と小学部の理科を担当しています。去年は小学1年生の担任でした。小学生と中学生を教えるのは、小さい日本人学校ならではの経験が役に立っています。常に暑いので教室にはエアコンがあり、日本の夏の教室より快適です。外の体育は汗だくになりますが、常夏なのでプールの授業が毎週あり、どの子も水泳が得意になります。また、現地講師による週2時間の英会話の授業も実施されています。スリランカで使われている言葉はシンハラ語、タミル語、英語の3つで、現地の人もおおむね英語が通じます。その為、英語の学習は生活と密着して役立っています。総合的な学習で

は、スリランカの伝統的な踊り『キャンディダンス』を習っています。2月に行われる文化発表会で伝統衣装を着て踊る子どもたちはお家の人の写真せめにあいます。

私は理科が専門なので、外国でも日本と同じように実験・観察をすることを目標に理科に取り組んでいます。しかし、季節や天気、天体を扱う単位ではビデオなどに頼ることになります。スリランカでは、日本の夏至の日には太陽が北の空を通りますし、季節は変化がなく、植物や動物の種類も日本とは違います。反対に興味深いのは、常に暖かいので季節に関係なく植物が育つこと、市場が近く物価が安いので肉屋で解剖の材料が手に入りやすいことです。



牛の目の解剖の様子



世界遺産のシーギリヤロックへ校外学習

日本人学校の子どもたちは、大人と一緒にではないとどこにも行けない環境にいるためか、大人に対してとても素直です。自立が遅くなるという懸念もありますが、

学習において、子どもたちが素直に話を聞くという姿勢ができてきていることはとても良いことだと思います。子どもにとって大人が近くにいてあげることの大切さを実感しています。

高温多湿、不安定な電圧のために電気器具、コンピュータの調子が頻繁に悪くなります。調子が悪くなっても、部品も十分でないスリランカ、ずいぶん自分で直すことが上手になりました。ホームページも作れるようになりました。コロナ日本人学校の様子をちょくちょく更新していますのでどうぞ見てください (<http://www.jscol.com/>)。

## 毎日が国際交流

平成19年度派遣 シドニー日本人学校  
小学部 間中 則子  
(坂東市立岩井第二小学校)

### 1 学校概要

シドニー日本人学校 (Sydney Japanese School) の最大の特徴は、主としてオーストラリアの子どもたちを受け入れている国際学級を小学部に併設していることである。日本人学級では文部科学省の学習指導要領に則った教育を行い、国際学級では、現地 NSW 州の教育課程に基づく教育を行っている。

国際学級を有する特長を生かすために、日豪両国語の学習をはじめ、音楽、図工、体育におけるミックスレッスンの実施、学校行事の合同実施、交換ホームステイプログラム等、あらゆる教育活動において日豪の児童・生徒による交流学习の場を設けている。



2

Sydney Japanese School

### 小学部

今年度は、小学部の4年生（Y4）の担任をしている。日本人学級は、全ての学年が単学級であり、併設されている国際学級と併せても2クラスである。また、全てのクラスが20人以下である。

4年生は、現在19名（男子10名、女子9名）である。今年度に入り転入児童が3名、転出児童も3名と出入りが激しい。

日々が国際交流の本校での前期は、ミックスレッスンの授業展開や校外交流そして慣れない土地での遠足に戸惑いながらもオーストラリアの教育課程事情を少しずつ理解し、国際学級の担任と協力をしながら進めることができた。児童もまた、校外交流の機会が多く現地校の児童とクロスカンントリー、サッカー、ドッジボール、ミニスポーツデーなどを通して、滞在が長期にわたる児童はもちろんであるが、転入して間もない児童も言葉の壁を越えて楽しい時間をもつことができた。また、先日（8月25日（土））には、冬だというのに25℃を越える暖かい日差しの中でスポーツデーが行われた。日本の運動会に等しいものだ。その中で行われた小学部全員での「よさこいソーラン」のパフォーマンスは、素晴らしかった。国際学級の児童も法被を身にまとい、日々上級生から演技指導を受けた成果を披露することができた。日々の国際交流がまさに形となった。

### 3 今後の課題

在任して約半年があつという間に過ぎた。初めて訪れた海外の地で仕事することの厳しさを痛感した。特に、国際学級が併設されているため、授業の中で児童に対して英語を使って指導することが必須であることに悪戦苦闘の日々である。今後、更なるスキルアップを図っていきたい。

また、海外生活を余儀なくされた児童の不安や戸惑いへの支援、学習指導の充実に努めていきたい。そして、何よりも児童が学校へ行くのが楽しいと思ってくれるよう学級経営の充実に努めていきたい。

まだ、スタートしたばかりで課題は山積みであるが、日々研修を重ねていきたい。



学級開きの日より  
—笑顔いっぱいの子ども達—

### ベルギーで学んだ自己責任

ブラッセル日本人学校 橋本 慎一郎  
(稲敷市立江戸崎小学校)

蒸し暑くない夏を迎えて3回目。ブリュッセルという都市で過ごす四季は、日本と比べて緩やかである。

学校と家を往復する忙しい毎日は日本とは変わらないが、ヨーロッパという感覚が生活の中で身についてきたようである。どんなに混んでいても、開かれた少ないレジで待たされること。車の修理など約束の時間に完成しないこと。自分のすることやしたことに対しては、すべて自己責任でやっていかななくてはならないこと。などなど…。きっちりかっちりしている日本のやりかたがどうもあまりにも、丁寧すぎるのではないかと、おせっかいすぎるのではないかと思えるようになってきた。

やりかけの工事現場には、スズランテープが1本あるだけ。日本であれば、がっちりとバリケードができてはいるはず。「危険な工事現場に入った者が悪い」という考えである。日本ではどうだろう。工事現場をはじめ、ため池や屋上をはじめ、がっちりと柵がこしらえてある。もし、誰かが転落でもすれば、それはたとえ私有地であれ管理者の責任になってしまう。アメリカの何でも訴訟という流れが、戦後入ってきたのであろう。

過去に本校の子どもが、朝のスクールバスを待ちながらバス停で遊んでいて道路に出てしまった。すると走行してきた車と接触してしまったという。幸い命には別状の無い軽いかすり傷であったが、その事故の行方というのは、保護者が悪いということになった。ベルギーは13歳になるまで、外出は常に保護者またそ

れに代わる大人と一緒にいなければならない。この場合、どうして保護者がしっかりと見ていなかったのかということで責任は保護者にある。これは、よくよく考えるとあたりまえのことである。子どもの責任は大人の責任。子どもでは責任がとれないから親がとるのである。

日本ではというと、学校にまで放課後の子どものケンカについての対応を求めてくる。万引きが発覚すると学校が頭を下げに行く。だれが取る責任なのだろうか。

所戻ってブリュッセルのメトロの階段。ベビーカーを押す人がいれば、周りの人が自然に運ぶのを手伝う。お年寄りや体が不自由な人がいれば近くの人が進んで席を譲る。ドアを開ける。自己責任の考えが定着しているとはいえ、思いやりの心は当然もっている。日本は義理とか人情とかいいつつも、思いやりの心は本当にあるのだろうか。責任の転嫁ばかりが目に見える世の中のように感じる。

日本は授業日数が230日を超える義務教育。ヨーロッパは150日ほど。夏休みは2か月半。水曜日が半日。もちろん週5日制。それでも、ヨーロッパはEU加盟国は先進国であり学力の低下はない。日本はがむしゃらに勉強をしていかないと落ちこぼれてしまうほど愚かなのだろうか。

アメリカに学ぶのでなく、これからはヨーロッパに学ぼうと思う。そして、欧米というヨーロッパとアメリカ合衆国を同一視するような言葉は、ヨーロッパの人に失礼だと思った。



## 上海日本人学校について

上海日本人学校浦東校 永岡範之  
(つくば市立高崎中学校)

日本企業の国際的諸活動の進展に伴い、

多くの日本人は子どもを帯同しています。2010年には上海世界博覧会も開催予定とあり、今後上海の日本人人口はまだまだ増加の傾向にあるようです。上海日本人学校は虹橋校と浦東校を合わせて、児童・生徒数が2,626名(2007年8月30日)となり、世界一のマンモス校です。

## 【上海日本人学校浦東校の様子】

上海日本人学校に赴任して2年6ヶ月が過ぎました。前任校での引継ぎや海外への引越しの準備をしていたことが、つい先日のように感じ、時の流れの早さを感じます。

2年次の時には上海日本人学校浦東校の開校。今までの虹橋校から異動をし、学校の立ち上げを経験できたのは、大変貴重なことでした。新しい校舎において、子ども達も新たな伝統を築いていこうという意識を強く持ち、児童会活動や生徒会活動においてはアイデアを出し合って様々な行事を実施しています。『浦東校開校1周年を祝う会』においては、開校後の1年間を振り返るとともに、学年ごとに「中国切り絵」や「中国結び」などの記念品を作成したり、校庭には手作り観察池を完成させました。小学部と中学部の児童・生徒が異学年交流を進め、行事の中では全校で楽しむことができます。

## 【最後に】

上海での生活は残りの半年となってしまったことを大変さみしく思います。日本全国から集まった個性豊かな先生方と子ども達と一緒に過ごせた時間は私にとって、宝となっています。今後の限られた派遣期間の中で、教師としての資質を向上させるべく、日々努力をしていきたいと思えます。最後になりましたが、茨城県の教育の更なる発展を祈念いたします。

## デュッセルドルフにて思う

デュッセルドルフ日本人学校 廣澤哲也  
(笠間市立岩間第一小学校)

ここドイツ・デュッセルドルフ市は、ノルトラインヴェストファーレン州の州都であり、人口は約60万人。市内にはライン川が流れ、北東部には「ルール工業地帯」が広がっており、ヨーロッパにおける日本企業の拠点の1つになっているところ。したがって、デュッセルドルフにはたくさんの日本人が在住し、日

本人学校にもたくさんのお子もたちが通っています（在籍数は小学部・中学部合わせて563人（2007年4月））。本校は創立37年を誇り、長い歴史と伝統が今でも引き継がれています。そして小・中学部が併設されていることを生かし、小中合同での運動会や学校祭が行われるなど、特色ある教育活動が行われています。

デュッセルドルフは、治安が良く安全でとても過ごしやすい街です。街には子どもが遊ぶ公園がたくさんあり、日中は子ども同士や親子連れで遊んでいる姿をよく見かけます。緑も多く、自宅の近くで野うさぎやリスを見かけることもあり大変驚きました。また、デュッセルドルフ市内のインマーマン通り、通称「日本人通り」へ行くと、日本食スーパーやレストランがたくさんあり、日本食が恋しくなったときは食することも出来ます。更には、日本の書籍を扱っている書店や日本の映画やドラマのレンタルビデオ(DVD)店をはじめ、日本のホテル、美容室、旅行代理店、銀行などがあり、日本人が生活するのに大変便利なところですよ。

赴任して半年が過ぎようとしています。今でも赴任が決まったときの喜び、驚き、不安とが入り混じった気持ちは鮮明に覚えています。そして、赴任してからも恵まれた環境の中で仕事が出来ることが喜びを感じています。まだまだ生活していく中でいろいろと戸惑うこともありますが、それらすべてのことを含めて、前向きに楽しく毎日を過ごしていきたい

と思っています。そして、デュッセルドルフでの日々をしっかりと心に刻んでいきたいと思



日本デーの花火を見にライン川に集まる人々



ライントワーから見たアルトシュタット(旧市街)

## 「違うもの 同じもの」

在コスタリカ日本国大使館附属サンホセ日本人学校 吉村 俊一  
(築西市立関城中学校)

サラサラサラ……。今日も、職員室の窓から豊かな緑色の葉を湛える木々が風に揺れている。平成17年度に赴任した当初、そんな音にも気付けないほど、ドキドキしていました。見るもの全てが新しく、すること全てが刺激的でした。

あれから、2年4ヶ月。私はどう変わったのだろうか？何かをなせたのだろうか？この原稿を書くにあたってそんなこと自分に問いかけてみました。

サンホセ日本人学校は、平成19年8月現在で19名（小学部12名、中学部7名）は職員11名（派遣8名、現地常勤1名、現地非常勤2名）の小さな学校です。しかし、一時期は、70名の在籍者数を数えるまでだったことから、校舎、体育館、校庭等日本の学校と遜色ない施設を有する恵まれた学校です。そして、生活や行事など、様々な活動で児童・生徒・職員全員が一緒になって活動する大家族のような雰囲気に満ちています。

そんな穏やかな空気の中にと、ふと、日本の学校を思い出すことがあります。「ああ、日本にいた頃は……」と。

日本にいた頃と、何が違っているのか？そう、自分に問いかけてみる。

まず、学校が置かれている国。習慣、風土、気候、歴史、すれ違う人々、食べ物。次に、先に述べた学校の様子。そして、そこにいる子ども達。日本国内外を問わず転校を何度となく経験を持っていたり、ここコスタリカで生まれ育っていたり、学校では日本語、家庭では、スペイン語を話していたり。さらには、職員。日本全国から集まった職員は、その土地柄によって違った教育方針に基づく職務経験を有しています。

これらを考えても、日本とは大違いだと思。いや、思っていた。少なくとも最初の一年間は。しかし、三年目の今、思うことは、「たとえ、外国でも、教師という仕事は変わらない。」ということだ。私がこの日本人学校で経験したすべてのことは、日本でもあり得ること、もしくは、あったことだと感じるようになってきました。

日本語が理解できずに、問題を読み取

るのに四苦八苦する児童や、次の転校を知り、落ち込む生徒。違う指導法をもった職員。これらすべては、日本でも変わらないもの。

今、国際理解という言葉の説明するならば、「違うもの（変わるもの）だけではなく、同じもの（変わらないもの）が日本の海の向こうにもあることを知ること」。そして、これは、国際理解の第一歩であり、教師としての第一歩でもあるように思います。

ここ、コスタリカは、新しい教師としての私の生まれた場所になりました。

パリ日本人学校 教諭 岡野真弓  
(平成18年度派遣)  
(ひたちなか市立外野小学校)

パリ日本人学校は、フランスの首都パリから西北へほぼ40 Km。ベルサイユに近いモンチニー市という、自然の豊かな学園都市にあります。大学を中心に、高校や中学、小学校、幼稚園が建ち並び、ショッピングセンターや劇場小さな美術館までが整っていて、つくば市を彷彿とさせる静かで穏やかな街です。

渡仏して2年目を迎え、フランスならではの行事や日本では体験できないような教育活動を、諸先輩のお力添えを頂きつつ、いくらかの余裕をもって行うことができるようになりました。本校職員は、現地採用の事務官5名の他、現地採用の講師が5名、日本からの派遣教員が15名の構成です。1年目の夏休みに集中講座としてパリで3週間フランス語を習い、その後十月から今年六月まで、近くの公民館で行われている外国人向けのフランス語講座を受講しましたが、フランス語の難しさはいっこうに解消されません。本校では「現地校交流」といって、年に二度、モンチニー市の小学校と校流を行っていますが、その際、フランス人の児童に話しかけられても返答に困るのが本音です。むこうは私を先生だと思っているから「マダム、マダム」と質問攻めです。こんなときに「ああ、大学でもう少しまじめにやっておくのだった」と後悔するのです。幸い、毎年、学級に何人かはフランスの現地校へ通い、語学が堪能な児童がいますので、その子達が通訳をかってでてくれます。平成十九年九月

に、五年生の社会見学として、オルレアンの近くのHONDAの工場に行ってきました。保護者の勤務先という関係から、日本語で説明を受け、イタリアから部品を運び、ヨーロッパ各国へ輸出しているということ学習してきました。本校は小学一年生以外はすべて単学級ですので、そういった見学の段取りや、打ち合わせはすべて担任ひとりで行います。二年目ともなれば慣れてきましたが、一年目に六年生をつれて、パリのポンピドー近代美術センターへ行ったときは、下見だけで五回通いました。パリは芸術の都だけあって、芸術鑑賞のシステムが整っています。館内の案内はコンフェランス（解説指導員）の資格を持った先生が有料で引き受けてくださるのです。今年十一月には、モンパルナスタワー近くのNHKに見学に行く予定です。その予約や、打ち合わせ等は、すべて日本語で行っていますが、やはりフランス語がもう少し話せたらなあと思うことしきりの毎日です。

どこの国でもそうでしょうが、日本人学校は、その国において日本文化を伝承するという役目を負っています。また、日本人学校イコール日本というイメージが確立していることも否めません。本校では年に一度「日本人学校まつり」を行い、たくさんのフランス人が本校を訪れます。フランスでは、マンガを始めアニメや、各種工業製品によって、日本に対するイメージはおおむね良い方です。しかしながら、アジアに対する偏見や有色人種を好まないフランス人もいることは確かで、人々の感触も様々といったほうがいいでしょう。

日本をよく知る人や日本文化が好きなのは多く、日本人の私より本当にいろいろな事をよく知っています。特に習字や武道に関心が高いようです。でも、中国と韓国と日本がいっしょで、「火星よりも遠い」と思っている人も少なくありません。日本人学校から現地校へ転校する児童もいますので、彼らはそういった「日本をよく知らない人たち」のなかで奇異の目にさらされ、つらい思いをすることも多いようです。モンチニー市にある、ある中学校の先生が自分のクラスの生徒があまりにも日本人の生徒を受け入れないので、「彼が通った日本人学校を訪問しよう！そして日本をよく見てこよう！」とクラス全員を連れて日本人学校へいら



したことがありました。生徒二十三名、引率は学級担任と生活指導の先生、図書館司書の先生の三名でした。受け入れたのは当時の六年生二十三名。同数だったため、ペアを組み、学校を案内し、習字体験や日本の中学校の紹介やマンガの読み比べなどを行いました。フランスでは大型スーパーでも日本の伝説マンガが手に入り、ドラゴンボールなどが大人気です。そのフランス人が、日本人学校の何におどろいたかというところ「コンピューター室で靴をぬぐこと」「そしてそのくつがきちんとそろえられていること」「学校

内に水槽があり、金魚や亀が飼われていること」「コンピューター室にコンピューターがたくさんあること(40台)」でした。そして「日本の子ども達はだれも笑顔でとても感じがいい」「日本人学校は事前によく準備をし、迎え入れてくれて、とってもいい人達だ」という印象を持ったようでした。今後も不自由なフランス語を駆使しながらも、フランス人に日本人の良さを分かってもらえるよう、幅広い国際交流を心がけていきたいと思っています。

## 茨城県の壮行会のお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の壮行会が下記の通り開催されますので、皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

### 記

- 1 日時 平成20年3月1日(土)  
14:30～ 受付開始  
15:00 開会
- 2 場所 三の丸ホテル  
水戸市三の丸2-1-1  
Tel 029-221-3011
- 3 問い合わせ先 つくばみらい市立小絹小学校 教頭 豊島 豊(本会事務局長)  
連絡先 0297-52-3008

## 広報・研修担当者よりのお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会では、年1回広報紙「SECO」を発行しておりますが、この広報誌は雑感的なものをまとめたものです。帰国した会員や在外教育施設に派遣されている会員の現状を知ってもらい、情報交換をするためには、意味のあるものです。しかし、これだけにとどまらず、海外での現地理理解教育・国際理解教育や日本での国際理解教育について、広く原稿を募集し、会員やその他の皆様の教育に資するものを作成したいと考えております。そこで、下記の通り現地理理解教育・国際理解教育に関する原稿を募集いたしますので、応募をお願いいたします。

### 記

- 1 内容(研究テーマ)  
①在外教育施設や国内の学校で行った

現地理理解教育・国際理解教育に関する研究

- ②派遣国理解に資する資料(自分でまとめたものに限る)
- ③外国人児童生徒の日本への適応に資する研究(生活指導や日本語指導も含む)

- 2 応募資格  
・本会会員及び会長が認めたもの

- 3 応募規定

- (1) 応募条件

- ①未発表の論文や研究に限る
- ②1人一篇とする。共同執筆も可。

- (2) 形式・タイトル等

- ①論文作成に当たっては、パソコンで「一太郎」もしくは「ワード」

- を使用のこと(手書き原稿は不可)。
- ② A4用紙使用, 縦置き・横書き(40字×50行)とする。
  - ③ 論文の構成は, 表紙・要旨・本文とする(但し, それぞれ別葉にすること)。
  - ④ 表紙には, 次の事項を記載のこと。
    - ア. 研究テーマ
    - イ. 氏名
    - ウ. 派遣国
    - エ. 派遣年度(※ 会員以外のものは, ウ, エは記入の必要はありません。)
    - オ. 学校名
    - カ. 学校住所
    - キ. 学校電話番号
  - ※ 共同執筆の場合は, 代表者の後に「代表」と記入し, 共同執筆者全員の氏名を記載すること。
  - ⑤ 要旨は, 2,000字以内とする。
  - ⑥ 本文
    - ア 制限枚数  
上記②の様式で10枚以内(図表, 注釈, 参考文献等含む)。
    - ※ 表紙, 要旨は, 本文には含めない。
    - イ 参考・引用文献については,

出典を明記のこと。

- 4 締切
  - ・平成20年5月31日
- 5 提出先
  - ・できるだけEメールの添付ファイルにて送信してください。
  - ※ アドレス  
[kouhou\\_1\(いち\)ibakai@yahoo.co.jp](mailto:kouhou_1(いち)ibakai@yahoo.co.jp)
  - ・Eメールで送信することができない場合には, 下記住所までFD, CD-R等の記憶媒体に入力して送付してください。
  - ※ 送付先  
〒311-2423  
茨城県潮来市日の出2-25-16  
河嶋 賢一  
Tel 0299-66-0870
- 6 その他
  - ・応募者多数の場合は, 茨海研のホームページのみの記載となることもあることをご了解下さい。

## あ と が き

ここに, 2007年度の広報誌第2号をお届けします。本号からページレイアウトを変更しました。

ここ2,3年で広報部にも大きな動きがありました。

一つ目は, ホームページが立ち上がり, 全海研のホームページからアクセスできるようになったことです。これは, 柴田先生のご尽力があったからです。感謝に耐えません。

二つ目は, 広報誌の発行が年に2回になったことです。第1号は, 帰国された先生方や在外教育施設に派遣されている先生方が, 国際理解教育を行うために資料となるべき原稿を記載しました。その参考になるように, 顧問の先生方や青年海外協力隊のOBの先生方よりも原稿をいただきました。どうもありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

日々の雑務に追われ, 海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとっ

て, この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。この広報誌が, 帰国された先生方には海外との接点に, そして在外教育施設に派遣されている先生方には, 日本との接点になってくれればいいなと感じながら編集しました。

広報誌は, 下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は, ご覧下さい。

ホームページアドレス -  
<http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思いますので, 広報誌に関するご意見がございましたら, 広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお, Eメールでのご意見は, 下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス ([kouhou1\(いち\)ibakai@yahoo.co.jp](mailto:kouhou1(いち)ibakai@yahoo.co.jp)) (文責 河嶋)

